

「社会福祉」の視点を、決して忘れることなく！

老人ホームに勤務する若いメル友から、以下のメール。

「今、職場にヘルパーの実習生が来ています。ただ、一つ疑問があってうちの施設だけなのか、他の施設もそうなのかわからないのですが、『コミュニケーション』だけの実習・・・。理由は、実習生に責任を持たせられないから・・・とか。う～ん・・・って、すごく考えてしまいました。食事介助・排泄介助・移乗介助など、教えることはあるのに・・・。実習をして、すぐ職に就こうと思っている方々にしたら、コミュニケーションの部分だけでは、他は何も実にならない実習なのでは？と思ってしまいます。」

これって、「実習生に責任を持たせられない」のでなく、指導する自分が責任を持ちたくないというだけの話に聞こえます。また、コミュニケーションって、話し言葉での声かけだけではないでしょう？係わり合いなくしても、コミュニケーションはあり得るとでも思っているのでしょうかね。

家庭にヘルプに行った時、何かない（事故がない）ようにどういうところを留意すればいいか、また、コミュニケーションとは係わり合いの中でこそ成立すること等を、実際に具体的に教えることこそが実習指導担当者の任と思う。

「これからは、地域福祉、地域福祉」と云われ、その担い手として期待され、多額の講習料を払って受講しているヘルパ - 受講生こそが、こうした実情では気の毒である。

こうした姿勢で福祉を担っていると勘違いしている施設は、マスコミでも取り上げられたある地方都市のNPOの運営する宅老所の虐待疑惑問題を持ち出すまでもなく、結構多そう。こうした福祉現場の実情じゃあ、メル友のような若者やヘルパ - が、福祉の担い手としては育ちようがないですよ。

ヘルパ - 実習を受け入れ、その期間中に自分の施設内で何かが起きなければそれでいいと思うのは、単なる個人福祉（「福祉」という言葉が不適切かもしれないが）である。やはり福祉現場の職員は、単に自らのことだけを考えるのではなく、社会の福祉を担ってくれるヘルパ - を教育するというような社会福祉の視点を、決して忘れないでもらいたいものである。福祉の現場の職員の姿勢がこの程度では、社会に向かって何をか云わんやである。

（2003年02月27日記）